要約

論文題目　宗教美術の身体美学：チベット・タンカの人類学的研究

氏名　張　詩雋

本研究の目的は、イギリスの人類学者であるアルフレッド・ジェルが指摘したモノのエージェンシーを認める一方、彼の研究で看過されたモノの美的な価値を改めて考察することである。具体的には、アメリカの哲学者、スーザン・バック＝モースの身体美学（コーポテティックス）という概念に依拠し、身体を介する美学的な認識の重要性を主張する。さらに本研究のもうひとつの目的は、チベット・タンカ（Tibetan thangka）というチベット文化圏で広く作られる美術品に注目し、従来の仏教美術やタンカ研究が重視する図像学の規則、量化・標準化される制作方法・様式美を退け、人類学者のマリノフスキーが提唱する「不可量の生」という立場からタンカに関わる人々が生きる中国・チベット社会を民族誌的に記述することである。

本論文は 2 部構成をとった。第 I 部の「神仏の肖像」では、チベット・タンカの身体美学を明らかにした。第 II 部の「近代化のなかで再編される『チベット・タンカ』」では、近代化、商品化によるタンカの身体美学の変容に注目しながら中国・西蔵の近代的な社会像を描き出した。以下、本論文の構成と内容について概観する。

まず序論においては、人類学におけるモノ研究、タンカ研究、近代チベットをめぐる表象の歴史を振りかえりながら本論文の理論的な視座を明らかにした。

人類学におけるモノ研究は長い歴史をもつが、人類学的なモノ研究は、モノを、人間によって意味付けされ価値を付与される客体と捉えていた。このようなアプローチ——本論文では意味論的なアプローチと呼ぶ——に対して、1990 年代以降ジェルの研究に代表される関係論的なアプローチが登場した。関係論的なアプローチはモノのエージェンシーを認め、モノのエージェンシーによって生まれる社会関係に注目する。この立場を本論文は踏襲する。しかしジェルの関係論的なアプローチにみられる、モノの美的な価値に対する等閑視を、本論文では疑問視する。ジェルが批判的に検討している美的な価値とは、「視覚上の美しさ」、「芸術的歴史の伝統に基づく解釈性」、そして「近代西洋の芸術世界に認められる価値」という 3 点に関連するが、いずれもカント以降の美学の潮流に寄り添う視点である。それに対して、本論文は美学の本来の役割に注目したい。即ち、美学（aesthetics）のギリシア語語源「*aisthētikos*、アイステティコス（感覚によって認識する）」が暗示するように、身体・感覚を通して美を認識し、自然や環境の模倣から芸術的な表現が生まれるという身体美学的な側面である。

以上の議論を踏まえ、序論の後半では、タンカ研究を整理し、タンカ研究において、図像学的な規則や西洋美術史に依拠する様式概念が重視されていること、さらにタンカの商品化に関する考察にはモノを資源・資本として利用するという道具的な価値観があることを指摘した。その上で、人類学的な立場からタンカの身体美学を考察するという本研究の意義を明らかにした。

また、チベットをめぐる近代的な表象の歴史を簡潔に整理し、本論文の立場を明確にした。従来、チベットの近代化に関する研究では、チベットの近代化が「漢化」か「西洋化」かということが議論される。本論文はこのいずれの立場にも立たず、日常的な生活世界に注意を払う人類学の立場から、チベットの近代化を複眼的にみるものである。

以下、各章の詳細を述べる。第 I 部は、第 1 章から第 4 章までの 4 つの章で構成される。第 1 章では、チベット研究に関連する重要な概念、チベットの自然、歴史、宗教を紹介した。タンカを生み出すチベットという場所、そしてその中心にあるラサについての記述から議論を始めた。

第 2 章は、チベット社会において、伝統的にタンカはいかに認識され、制作、崇拝されてきたかに注目し、タンカの様式を人類学的に分析した。まずタンカは壁画、彫刻、経文、仏塔とともにグ・ソン・トゥ・テン（sku gsung thugs rten）というチベット美術のジャンルに属する。グ・ソン・トゥ・テンの制作は度量経（thig tshad）を規範とする。共通する数値的な比率、顔料、装飾模様が用いられることで、グ・ソン・トゥ・テンの均斉かつ荘厳な様式美が担保される。本論文では、このほかにタンカには、ピニー（2001、2004）がヒンドゥー教のイコンを例に提示した演劇性と没入性という様式がみられることを指摘した。演劇性（theatricality）は、像の顔や姿勢という神仏からの「声かけ」を意味する。没入性（absorptivity）は、神仏の世界、チベットのコスモロジーを表現する背景の吸引力を意味する。この 2 点は、タンカの身体美学に欠かせいない様式上の特徴と考えられる。

第 3 章ではタンカ制作に注目した。まず功徳という概念を手がかりに、タンカの多様な仕事およびタンカの身体美学的な効果の強さを示した。次にラサ市にあるタンカ制作所に注目した。そこで日々行われる制作・学習実践、宗教実践を記述し、タンカ制作の 3 つの特徴を抽出した。それは第一に、度量経に記述される量化・標準化される方法の裏には不可量の経験、技術、人間関係があること。第二に、身体物質をタンカの絵の具に用いることで絵師とタンカは相互生成の関係にあること。第三に、タンカ制作において絵師が自らの身体を使って世界（＝仏の身体）を測るという点から、タンカ制作とチベットの宗教実践は共通する原理をもつこと。以上、3 点を明らかに

した。タンカ制作は、一方でタンカが絵師の身体物質を得て、真言を書き込まれることで仏の身体という能動的な存在になる過程であり、他方で絵師が自分の身体をタンカに入れることで聖なるタンカ、仏の身体になる過程でもある。

第 4 章ではタンカに関わる各種の宗教実践・儀礼の現場に注目した。観想実践用のタンカへの考察は、タンカの視覚上の美の相対性を提示し、タンカのもつ功徳を蓄積する道具としての一面を明らかにした。しかしながら、加持儀礼に登場する超度像タンカや、特別な人のために作られた供養タンカは、「この（人の）タンカならでは」の感情を喚起させるため、視覚上の美や類似性が求められる。このようにタンカは多様な効果を発揮しつつ人々の生活に密着している。第 4 章の後半では、ショトン祭りのタンカ開帳儀式を紹介し、タンカによって再編される感覚体験を示した。巨大なタンカを目の前にすると、対象を客体としてとらえる視覚の特性は、対象に圧倒され巻き込まれる感覚に置き換わる。この経験によって認識されるタンカの身体美学は、タンカの視覚的な美しさについての判断ではないし、儀礼中に奏でる宗教音楽の良さの聞き分けや経文の深刻な意味に基づく理解でもない。または線香の香りや僧院の空間による生じる癒しの感覚だけでもない。タンカの身体美学とは、その驚異の感覚、耳で捉えきれない身体を共振させる音や響き、むせるほどのサン（香木）の匂いや人込みが放つ体臭、そして、祭典の後で味わう甜茶や蔵麺の味の全体を含む。こうしてタンカは、人々の五感で体験され、さらに五感が混じり合うことで記憶に新たな現実を刻みこむ。

さて、このような身体美学的なタンカは、近代化が進む西蔵においていかなる変貌をとげているのだろうか。第Ⅱ部では、中国・西蔵の近代化という背景のもと、タンカが文化資源・文化資本に変身する過程について検討した。

第 5 章では、西蔵の近代化の歴史、ラサにおける近代芸術運動を現地の資料や人々の語りをもとに考察した。中国および西蔵の近代化は国や政府によって主導されてきた。西洋起源の近代的な概念、例えば「近代化」「産業化」「伝統」「文化」「非物質文化遺産」などの言葉が、中国や西蔵で再・文脈化される際、別の意味が付け加わる。西蔵の近代化は、現地で多様に解釈された近代に関わる諸概念と、外部社会のもつ心象上のチベット像を脚本にして行われた模擬（simulation）であることを指摘した。

第 6 章はタンカの近代的な変化を「産業化」「非物質文化遺産登録」といった事例を通して考察した。国家や地域の行政側、一部の名人絵師が主導するこれらのプロジェクトにおいて、絵師の世界観を形づくる度量経は試験の参考書となり、タンカの画布は問題用紙として、タンカの標準化が進められている。そして、匿名のタンカ絵師は「伝承人」や「民族芸術家」などと名乗り始め、タンカは神仏の身体という物質的な存在か

ら「非物質文化遺産」として評価される対象になりつつある。さらにユネスコの無形文化遺産リスト、中国国家の無形文化財リストに多数ノミネートされることで、タンカは、「中華民族の文化宝庫」に確実に収納され、政治的宣伝においても本領を発揮している。

しかし、第 6 章では、無形文化財として展示されたタンカは、国家のイデオロギーとして利用されてはいても、より自由な展示方法のなかで、演劇性と没入性の様式美によって、観者に多様な思いとつながりを喚起している。近代化が進行する中、タンカの身体美学は無視される傾向にあるが、像の力は、文字化されるイデオロギー的な宣伝を凌駕することもある。

第 7 章ではタンカの産業化に関わるもう一つの変化——「タンカの芸術化」について考察した。西蔵の近代化が進むなか、近代西洋で誕生した芸術という概念からそれを生み出す方法までが、タンカの商品化に大きな影響を与えている。その中で、一部の名人絵師はタンカの芸術化を推進し、タンカをハイカルチャーとして売り出している。タンカの社会的なステータスをめぐる提案、現代タンカ・オークションといった事例を通して、かつては人々の日常生活に密着していたタンカが、一部の人の文化資本になり、個人化されていくことを明らかにした。

この動向に関係し第 8 章では、タンカの「産業化」「非物質文化遺産化」「芸術化」といった現代的なトレンドに乗り遅れた絵師たちに焦点を当てた。閉校したラサ初のタンカ学校、ラサでの高い生活費に悩んだすえタンカをやめた若手絵師、ラサを離れ新しい環境でタンカを描きつづける絵師をとりあげ、彼らのライフストーリーを記述した。華やかなタンカ産業、豊かな西蔵という近代像の影にある部分を示すことで論を閉じた。

論文の末尾となる第 9 章においては、以上の考察をまとめて、芸術の人類学的研究への理論的貢献だけでなく、現代西蔵社会の理解においても、身体美学の概念に依拠することの重要性を示した。本論文の考察が示したように、モノのエージェンシーを考察するにあたって、人間の身体、感覚、記憶、経験に深く関連する身体美学という視点は欠かせないと考えられる。タンカは、その身体美学を通してエージェンシーを行使し、人々を魅力する。

チベット社会において、タンカは神仏の表象・身体として人々の生活のあらゆる場面に関与する。その制作は、量化・基準化する図像学の規則に依拠するが、実際の制作現場では、神仏・師匠への模倣によって得る技術と経験、身体物質を介して形成する相互交渉的な人・モノ関係といった不可量の部分がタンカの身体美学をなす。そして、この身体美学的なタンカは、儀礼祭典で人々を魅了する。

ただ一方で、近代化が進む現代チベットでは、タンカの身体美学は、近代的な価値観、制度、西洋の審美学からの影響を受けている。絵師やタンカの関係者は、「近代化」「芸術」など、様々なイメージのもとで「タンカ芸術」という枠組みを生み出した。このような状況の中、本論文は、模倣から作り出す芸術、身体・感覚を媒介として認識される美、このような身体美学は、美の本来の役割を改めて認識させる。